



城

第五十二回 小松城

～北国随一の要害～

深草 祐一

かつて明智光秀が越前の朝倉氏の客将だった頃、朝倉義景から、加賀一向一揆勢に対抗するにあたり城を築くのに適した要害の地はどこかと問われ、「加賀にては小松あたり」と答えたといひます。その地に築かれた小松城の存在は、関ヶ原の戦いの折、徳川家康についた前田利長の軍が関ヶ原に参陣できなかった経緯に大きな影響を与えました。

小松城の立地

戦国時代の加賀国といえば、加賀一向一揆が支配した国として知られます。その発端となったのは、加賀守護の富樫氏の家督争いにおける蓮台寺城の戦いといわれています。現在の小松市郊外の小高い尾根筋にあった蓮台寺城から日本海側を見下ろすと、辺りに低湿地が広がっており、そこには小松寺という寺があったといひます。越前の朝倉氏が織田信長に滅ぼされ、一向一揆勢が織田の軍勢と戦い始めた頃、一向一揆勢が小松寺周辺の笹藪を薙ぎ払って築城したのが小松城の始まりと伝わります。小松城は、低湿地の中の島状の土地に築かれた平城で、このようなタイプの平城は、軍勢を寄せようとしても泥田に足をとられて身動きがとれなくなり、そこを弓や鉄砲で狙い撃ちされるため、攻めるのが非常に難しい城です。他にも備中高松城、武州忍城などがありますが、水攻めにしなくなるのもうなずける非常に堅固な要害でした。また、小松城の北方数キロには川幅の広い手取川が流れており金沢城がある加賀北部地域との間を隔てていましたので、加賀南部の戦略拠点として、小松城は非常に重要な立地にあったともいえるでしょう。

北国の関ヶ原 ～情勢～

関ヶ原の戦いの際には、同時に各地で攻城戦が行われており、そのために関ヶ原に参陣できなかった軍



勢は東西両軍それぞれで相当数に上ります。例えば、徳川秀忠率いる徳川主力部隊3万8千が真田昌幸の上田城を攻めて失敗し、関ヶ原の決戦に間に合わなかったのは有名な話です。一方、石田三成方のいわゆる西軍には、丹後田辺城攻略部隊2万がいた他、毛利元康が率いる1万5千の部隊が関ヶ原の決戦のまさに当日に近江大津城を開城させており、あと1日でもあれば立花宗茂らを含む有力な軍勢が関ヶ原に合流できたはずでした。あのタイミングで一気に勝負に出て強引に勝利をもぎとった家康は、さすがの戦上手といえるでしょう。

さて、北国方面の鍵を握る加賀金沢城主の前田利長は、秀吉亡き後の豊臣政権において家康に唯一対抗できたといわれる前田利家の嫡男です。しかし、利家の死後、家康の謀略により謀反の嫌疑をかけられ、母の芳春院(まつ)を江戸へ人質に出して危機を脱したという経緯があり、以後は家康に逆らわない外交方針で前田家を守っていました。そのため、関ヶ原の際、前田利長は当初から徳川家康に味方します。一方、その南側に隣接する小松城主の丹羽長重の他、加賀南部から越前の小大名たちの多くは、石田三成の盟友である越前敦賀城主の大谷吉継の説得に応じ

て西軍につくかたちになりました。実は、丹羽長重は隣接する前田家の監視を家康から密かに命じられており、前田、丹羽の両者の関係は微妙なものがあったようです。そこに関ヶ原の戦いにつながる一連の戦いは始まり、徳川家康から前田利長へ出陣要請が届き、丹羽長重には何の連絡も来ませんでした。そして、軍を催した前田利長から監視役であるはずの丹羽長重へ、家康軍に合流するために人質を出した上で従軍するように使者が遣わされたのですから、不満と疑心暗鬼が生じて仕方がないと思われまゝ。丹羽長重は前田利長の要請を拒否して小松城に立て籠もり、そのまま西軍につくことになったのでした。

北国の関ヶ原 ～浅井暁の戦い～

前田利長は、北国のほとんどの大名が敵方に回った情勢を憂慮し、弟の能登七尾城主前田利政と共に2万5千の大軍を率いて敵対勢力を平定すべく南下します。そして、まず丹羽長重が3千の手勢で籠城する小松城へ向かいました。しかし、小松城の要害を見るにつけ、これを強引に攻めるのは得策ではないと判断し、さらに南の大聖寺城を攻める方針に切り替えて、軍を移動させました。そして、大聖寺城をわずか一日で落とした前田勢は、さらに軍を南下させ、越前北ノ庄城に迫りました。ここで、大谷吉継が策を巡らせます。前田利長の耳に入るように、「西軍は伏見城を陥落させ、上方を制圧した」、「越後で一揆が起こり越中へ攻め込む勢いだ」、「小松城の丹羽勢が前田領へ乱入した」、「大谷吉継が北国勢4万を率いて進軍し、半数は北ノ庄より、残りは船にて加賀へ上陸して金沢城を攻める」などという、事実と虚報を織り交ぜた情報を流したようです。結果的に、前田利長は一旦金沢への撤退を決意しました。この動きをキャッチした丹羽長重は、小松城南東にある木場潟の北の浅井暁で待ち伏せを命じます。「暁」とは泥田の中の細い畦道のようなものを意味し、数で劣る軍勢が攻撃をかけるには絶好のポイントでした。丹羽勢は前田勢の最後尾部隊を攻撃し多数の武将を討ち取ります。しかし、前田勢も奮戦し、先行する部隊が駆け戻って勇戦するにおよび、丹羽勢も多くの武将を討ち取られ小松城へ撤退しました。こうして、前田勢は大きな犠牲を払いながらも金沢へ撤退することができたのでした。

ところが、大谷勢の海路からの攻撃などは全くの虚報でした。そして、前田利長のもとに、あらためて

家康から出陣要請が届きます。しかし、今回は弟の利政が動かず、利長は仕方なく単独で出陣することになりますが、まず小松城をなんとかしなければなりません。ただ、この時になると、丹羽長重は情勢を見て考え直し、本来ならば味方するはずだった家康方につくため前田利長に降伏を申し出ます。そして、人質交換を行って前田軍に加わりました。この時、前田家からは、後に利長の跡を継ぐことになる弟の利常が人質として小松城に入っています。そうして、前田利長が丹羽長重も引き連れて越前へと進軍した時、関ヶ原ではわずか一日の戦いで家康の勝利が決していました。しかしながら、家康としては前田利長が敵にならなただけで上々であり、始めから東軍として行動した前田利長は、小松を含む加賀南部と弟利政が改易された後の能登も加増されて120万石超の日本一の大大名となったのでした。なお、丹羽長重は前田利長のとりなしにも関わらず所領を没収されてしまいましたが、その人柄を惜しまれ、後に徳川秀忠から召し出されて大名に返り咲いています。

その後の小松城

前田領となった小松城は、一国一城令によって一旦廃城となりますが、後に前田利常が隠居城として再築城することを幕府に認めさせ、金沢城を凌ぐ城域に七つの島を連結した大城郭として生まれ変わりました。幼い頃に人質として過ごしたことがある小松城で、利常は、丹羽長重が自ら梨を剥いて与えてくれた時のことを思い出しては家臣達に語って聞かせたといひます。利常没後は、城代、城番が置かれて管理され、明治を迎えました。元々平城だった小松城跡は開発が進み、三の丸だった場所に芦城公園として大名庭園が整備されている他は、石川県立小松高校のグラウンド脇に本丸の天守台石垣がひっそり残るだけとなっています。しかし、市街地を少し離れて浅井暁古戦場まで来れば、まだ水田地帯が残っており、往事の浅井暁を想像することができます。



蓮台寺城跡から浅井暁古戦場を望む